

「百学連環」の歴史的 position と意義

渡 部 望

はじめに

1. 「百学連環」とライデン大学
2. 「百学連環」と大学構想
3. 「百学連環」における「理学」
4. 「百学連環」における「哲学」

おわりに

はじめに

大久保利謙は「百学連環」の基本的性格について次のように述べている。

「百学連環」は私塾育英舎における学問概論の講義ともいべきものである。ところで、この講義が対象とする「学問」、「学術」は、もとより日本旧来の儒教的ないわゆる「道」の学び、または古典の学びというようなものでなく近代の学問であるが、さりとて福沢諭吉が『学問のすすめ』で説いた「人間普通日用に近き実学」というような日常的な実用知識でもなく、高度の西洋近代学術Science、Wissenschaftのことである。これを「百学連環」といったのは西洋のEncyclopediaからきているので（総論冒頭）、西洋の諸学問を一貫した体系のもとに組織的に講述しようとする試みなので、内容的に専門的ではある。「童子を輪の中に入れて教育なす」とある。つまり大学的授業を目的とした童子を大学生と考えればよい。基礎講座といったもので、当時の日本としてはまさに破天荒な試みといわなければならない。これは、幕末のオランダ留学に由来するもので、フィセリングSimon Visselingライデン大学教授からうけた五科の学習、さらに西洋の諸学の在り方、学問の方法を学んだ結果であった¹⁾。

簡潔な紹介文だが、「百学連環」の四つの基本的性格が周到に捉えられている。第一に、これは西洋近代の学問を体系的に紹介する概論であること、第二に、儒教的学問への批判

的視点に立っていること、第三に、学問内容が実学ではなく高度近代学術であること、第四に、これがオランダ留学経験にもとづく大学的授業の試みであるということである。本論がめざすのは、ここに新たな発見を付け加えることではなく、これを複数の歴史的文脈のなかに置き、いわば斜光をあてることによって「百学連環」に若干の立体的なイメージを与えようとするものにすぎない。

1. 「百学連環」とライデン大学

「百学連環」「総論Introduction」の冒頭で、西は「百学連環」という講義題目の意味を次のように説明する。

英国のEncyclopediaなる語の源は、希臘のΕγκυκλιος παιδείαなる語より来りて、即其辞義は童子を輪の中に入れて教育なすとの意なり。故に今之を訳して百学連環と額す。従来西洋法律等の学に於ては、総て口訣を以て教授なすと雖も、此Encyclopediaなるものを以て口授するの教あることなし。然れども英国にEncyclopedia of Political Scienceなるものありて、即ち口授するの教へあり。故に今之に倣ふて浅学の輩を導かむと欲する余が創見に出る所なり²⁾。

今日ではencyclopediaには「百科事典」「百科全書」という訳語が定着している。だが西はギリシア語の語源にさかのぼり、それが「円環」kuklosと「子供」「教育」paidosというふたつの言葉から構成されていることに注目して「百学連環」という訳語をあてる。「童子を輪の中に入れて教育なす」というイメージを生かそうとしたのである。この訳語のニュアンスは「百科事典」のそれとは異なる。「百科事典」とは一義的には書物の分類上の名称であり、体系的網羅的に記述された「知」の外在的表現である。書架に配列された「百科辞典」は秩序づけられた「知」の統一体の静的なイメージを喚起する。しかし「百学連環」はむしろ読者がその書物を読む行為に焦点を当てた表現である。「百学」が円環状に配置された空間に身を置いて「学ぶ」、その運動のイメージを強く喚起する表現である³⁾。

「百学連環」は西が育英舎でおこなった講義の口述記録であり、そこに「学び」の運動があらかじめ想定されているのは当然である。だがここで考えてみたいのは、西が「百学連環」によって日本にもたらそうとしたものが何であったかということである。それは西洋近代の体系化された知の総体の紹介という以上に、「西洋的な知の運動」の導入ではなかっただろうか。それはまた西がライデン大学という「百学」が「連環」された空間のなかで発見した「学び」の経験そのものではなかっただろうか。さらに言えば「百学連環」はライデン大学の隠喩的な再現なのではないか。

ここで時間をさかのぼって西のライデン大学留学を振り返ってみよう。「百学連環」は明治3年末から明治6年頃まで育英舎で講義された。西暦でいうと1870年から1873年、西

42-45歳の時期である。この講義の始まる8年前の文久2年(1862)6月、西はオランダに向けて出発し、翌1863年から2年間ライデン大学に学び、慶応元年(1865)12月に帰国する。35歳から37歳にかけてのことであった。西は何を学ぼうとして留学を志したのだろうか。彼はオランダに向かう船の中から、オランダで世話をしてくれることになっていた日本学者ホフマンに宛てて書簡を送り、オランダ留学の目的を次のように説明している。

(…) 学問や技術の点でも若干のことを除いてほとんど知られていません。さらに、その学問も物理学・数学・化学・植物学・地理学・歴史学を教えるのみです。また四つの言語、オランダ語・高地ドイツ語・英語・フランス語を読むのみで、わずかに役立つに止まっているという状態にあります。ヨーロッパ諸国との関係においてもまた多くの内政上および施設の改良を行うためにも、より一層必要な学問があり、これらは統計学・法律学・経済学・政治学および外交の学等の領域にも求めなければならないものですが、これらの学問は日本では未だ全く知られてはいないのです。

私どもの意図するところはこれらのすべての学問を学ぶことにあります。しかしそこには困難な問題があります。それはわずか二、三年の滞在中にこのように多くの、またこのように重要な事項を全部学ぶということは実際不可能なことです。

私の計画としてはその要領をかいつまんで学びたいと思います。そして、これらの学科を順序を立てて一つ一つ学ぶことは今後派遣されるべき第二回目の若い学生にやらせることとします。(…)

以上の外にまた、私は哲学あるいは愛智学といわれる学問の領域をも学びたいと思います。わが国の法律で禁止されている神学とは異なり、この学問はデカルト・ロック・ヘーゲル・カント等の唱道したものであります⁴⁾。

この書簡から、西はオランダ留学に三つの目的をもっていたことがわかる。第一に、幕府が開国によって直面することになった外交、通商、政治的問題解決のための社会科学的知識の習得、第二に、次世代の専門家養成の基礎を築くための西洋学問の全体像把握、そして第三に、西周個人の関心事である哲学研究である。言い換えれば、幕府のため、後生のため、自分自身のため、という三重の目的である。ここでまずわれわれが目じりたいのは第二の目的である。これがライデンでの経験を通じて、西の日本における大学構想へとつながり、曲折を経て「百学連環」に結実したのではないかと想像したいのだ。ではライデンでの西の経験とはどのようなものであったか。

西がオランダで受けた教育について、大久保利謙は次のように述べている。

西、津田は法学、経済学などの西洋社会科学を学びたいという志望によってフィ

セリング教授は西・津田のためにNatuuregt自然法（性法之学）、Volkenregt国際法（万国公法之学）、Staatsregt国法学（国法之学）、Staathuskunde経済学（制産之学）、Statistiek統計学（政表之学）の五科を講述した。これがフィセリング立案の五科であるが、これはたんなる法、経諸学の羅列ではなく、社会科学の体系的教授として考案したものと解される。要旨は当時の社会・人文思想の基本となっていた自然法（性法）を基礎とし、そのうえに国法学の系列と経済学の系列、それに国際関係学を加えた「治国学の原始」講座であって、東洋から来た二人の学習目的とその素養を考慮した大学的カリキュラムであった。要旨は、フィセリングの講義案の「性法万国公法国法制産学成表口訣」、「五科学習に関するフィセリングの覚書」をみればわかるし、西らもこの特別講座によって西洋のユニバーシティーにおける「学問の研究」、つまり大学的な学問の在り方、方法がどのようなものであるかを、まだライデン大学の实地見学によって大学における教授法、研究法を知ることができた⁵⁾。

西はフィセリングから、幕府が期待した「治国学の原始」を学んでいる。だが西によってより重要だったのは、「大学的カリキュラム」それ自体だったのではなからうか。つまり五つの学科が「体系的」に教授したされたことである。句読と素読によるテキスト講読という日本的な教授法しか知らなかった西にとってこれは大きな驚きだったに違いない⁶⁾。しかも教授法の体系性はフィセリングの独創でも何でもなく、学問そのものに内在する体系性の表出であった。社会科学の学問が専門分化されながら全体として体系を形成していて、それらは体系的に教授できる。この教育システム＝学問システムは驚きに満ちた経験であったに違いない。西は社会科学の知識を吸収しただけではなく、西洋的学問の在り方に直接触れたのであった。それは教授方法であり、学問の体系と方法であり、それらを通底する西洋近代科学の認識論の総体的経験であった。これらは「百学連環」で繰り返し強調される中心テーマであるが、それはまた西のオランダ留学体験の核心でもあったと考えられる。

また見逃してはならないのは、西はそれらを成立させている大学というヨーロッパ文明が発明した知の空間の発見である。「ライデン大学の实地見学」は西に大きな衝撃を与えた。そのことは「百学連環」のなかで西が「インスチチュション」の重要性を指摘していることから推測できる。西は「文事」が学術を達するための重要な媒体であることを述べたあとで、しかしながら学術推進のための方法・媒体には文事以外にも様々なものがあるとして、「又其上にinstitutionなるあり。その設けとはschool, university, 或はacademy, college, gymnasium. 皆学校の名にして、即ちインスチチュションなるものなり」と続ける。そして、更に、「凡そ世界中ありとあらゆるものを集めて、以て四方に通するに便り」する博物館（コイン博物館、古代博物館、器機博物館、地理館、耕具館）、動物園、植物園、解剖館、新書館（図書館か）、Patent Office, Copyrightを紹介し、「右総てインスチチュションの中にし

て、皆大に學術を助け人智を開くに至れり」⁷⁾としている。ライデン大学にはオランダ最古の植物園や王立植物標本室、民族博物館などヨーロッパ有数の博物館が存在し、博物館の大学と呼ばれていた。オランダ東インド会社を通じてアジア各地から送られてきた膨大な植物や植物標本、またシーボルトの収集した民族コレクションなどありとあらゆる種類の膨大な「もの」が収蔵されていた。西はそうしたインスチテュションを見学しただろうし、「もの」の収集と蓄積が学術研究の基礎であることを知ったと思われる。

博物館はまた同時に観察、実験そして帰納法という西洋学問固有の研究方法の雄弁で具体的な表現でもあった。西は「Botany此学校は世界のあるとある草木を寄せ集めたれば、其中薬となり、毒あり、用あり、不用あり其毒も不用も悉く集るは皆陰表を求むるなり。或はZoology禽獸園も亦同意にして、あるとある禽獸魚類を悉く集め、陰表を求むるに供せり」として、「収集する」ことが陰表negative resultを証明する手段であることを強調する。そして狐が人をだまさないという真理を得るためには、多くの狐を捕獲して実験観察する以外の方法はないと述べる。西が「物に就いて其理を極めざるへからず」ということを強調するのは、事実（事物）の観察と実験から真理を導き出す帰納法にたいする確信の表明である。博物館の存在とミルの演繹法とはコインの両面であった。博物館と研究室とが内的論理で有機的に連環している大学空間、この真理探究の場の経験が「百学連環」の基層をなしているのである。

2. 「百学連環」と大学構想

さて西はそのライデン大学経験をどのように日本に生かそうとしたのであろうか。オランダから帰国した後の行動を追ってみよう。「西家略譜」に帰国翌年、慶応二年の次のような記述がある。「上命として開成所授業規則の取調を市川齋宮、加藤弘造、津田真一郎、西周助に命ぜられたり。是より日々市川、加藤又は余が官舎に会して其調成に従事したり。兎角する内二月も過ぎ、三月となり、其調成も半ばになれり」⁸⁾。蕃書調所は文久三年に開成所と改称されていた。また弘造は加藤弘之、真一郎は真道である。西は開成所のカリキュラム改訂の仕事に従事しているのである。この規則の内容は伝わっていないが、大久保利謙は「このとき新帰朝の兩人をして学制の改革を計らしめんとしたもの」⁹⁾と推測している。元治元年の規則書による蕃書調所の学科構成は、「和蘭学、英吉利学、仏蘭西学、独逸学、露西亜学」の語学と「天文学、地理学、究理学、数学、物理学、化学、器械学、画学、活学」の「諸學術」とで成っていた。その後、「西洋学」と「歴史学」が加えられたが、やはり極端に技術面に偏った内容であった。西と津田に期待されたのはおそらくそこに社会科学的学科を導入することであったと想像できる。だがまもなく西は「万国公法」の翻訳を命じられ、さらに九月には京都の徳川慶喜に呼ばれて開成所を離れることになる。大久保利謙は『日本の大学』のなかで、開成所について次のように述べている。「いま学校としての角度から調所の本質を考えてみるに、結局これは技術者の養成のための専門学校、

ないしは一種の職業学校であった。対象となる洋学が特殊技術として意義づけられておったから、その教育がなくなったことは当然であろう。」¹⁰⁾ 西と津田の社会科学導入による開成所改革構想は頓挫したと言わなければならない。

慶応3年4月、西は京都から江戸に戻った津田真道に書簡を送り、「将又聖堂へ洋訳之科開候事林家ニも既ニ承引ニ而、古賀先生当りも其説之由、若事左様相成候得は大兄之御骨折所希望御座候」¹¹⁾と記している。これは従来儒学だけを講じてきた昌平校で洋学が教科として加えられるという改革を指しており、開成所の津田真道がそれに関わったことを暗示している。大久保利謙はこのことを「かつて横文字書籍の持ち込みすら厳禁した攘夷的の昌平校としては、時勢の力とはいえまことに破天荒の試みであった」¹²⁾と記している。西と津田の留学は昌平校に波及するほどの影響力をもった事件だったことが推測できる。

さて西は京都で慶喜のブレーンの位置に身を置きながらも、将軍にフランス語の教授をさせられたり、外交文書の翻訳を命ぜられたりと、不本意な日々を送ることになる。西は「西家略譜」のなかで、「此頃閑暇なれば公法訳本の校正などに従事し余は酒色に日を消せり」¹³⁾とその鬱屈を記している。幕府での仕事は不本意なものではあったのだが、他方で西が開いていた私塾は多くの塾生を迎え繁栄していた。西洋の政事講義を聴こうとする会津、桑名、津、福井、備中松山らの藩士は500人に達した。オランダ留学の成果は私塾という空間のなかで、洋学の普及という教育面で果たされたわけである。ちなみにこの私塾の講義記録が「百一新論」の母体となる。西の哲学研究も新たな地平を迎えようとしていた。

だがまもなく、鳥羽伏見の戦いによって戊辰戦争が勃発し、西は慶喜と行動を共にすることになる。京都を離れ、江戸、水戸を転々とし、学問を続けることも困難な時期に入る。大政奉還後、静岡藩に戻った慶喜は徳川家兵学校（のちに沼津兵学校と改称）を設立し、西を頭取として呼び寄せる。徳川家が本格的学問所として創設した沼津兵学校で西がどのような仕事をしたのかは、ほとんど分かっていないが、蓮沼啓介は「彼が兵学校の頭取となした仕事の中心が、あくまでも「学校規則」の制定にあったことに間違いはない」¹⁴⁾と記している。西の起草した「徳川家兵学校掟書」を見ると、「万国史経済説大略」という授業科目がある¹⁵⁾。おそらくこれは西の発想であり、開成所から一歩進んだ授業内容だと言ってもよいだろう。しかし全体的にはやはり「兵学校」としての専門性が色濃く、とても大学のカリキュラムと呼ぶことはできない。西の沼津での生活は2年で終わる。明治3年9月、西は新政府に呼ばれ、上京するのである。

新政府は西に何を期待し、西はそれにどう答えたのか。その点に関しては蓮沼啓介の『西周に於ける哲学の成立』が詳しい¹⁶⁾。それによると「新政府は、新時代の幕開けにふさわしい「学制」の起草という重大な仕事を西と津田に託した」のであった。西は「学制取調御用掛兼任」として東京に呼ばれた。「兼任」とあるのは兵部省からの辞令も同時に下っていたからである。西は10月8日に出張して「学制取調之局」と引き受け、9日に大学御用掛の副島種臣に謁見し、27日には矢野玄道を交えて新しい学制の基本となる「大綱五

条」を議定する。そして閏10月25日には「大学条例」の校正を完成し、27日に提出している。蓮沼によるとこれは明治3年閏10月の大学南校規則である¹⁷⁾。

ここでこの「大学南校規則」がどのような意味を持つものかを確認しておく必要がある。大久保利謙の『日本の大学』¹⁸⁾に依拠しながら、明治初年の大学制度改革の流れの中でこの「大学南校規則」の占める位置を確認しておこう。明治2年7月、東京に大学校が設立された。主体は昌平学校を継承したものであるが、京都の皇学館から受け継いだところが多かった。皇学館とは国学主義の大学案「学舎制」にもとづいて京都に設立された大学である。「学舎制」とは明治政府が明治元年に神祇事務局判事平田鉄胤、内国事務局権判事玉末操、矢野玄道に命じて作らせた学校制度規則である。国学思想に彩られた学舎制に規定された皇学館は、学内に皇祖天神社を祭るという復古主義的色彩の濃い学校であった。だが明治元年12月に開講したものの、種々の事情で明治2年9月に廃止される。これが大学校の原型である。

東京で明治2年7月に設立された大学は旧幕府の昌平校、開成所、医学校の三校を継承したものであった。そのうち大学本校は昌平校を母体としながらも、内容的には皇学館の思想を多く取り込み、国学を第一として漢学を兼併する「皇漢合併」の大学であった。しかし開講直後から国学・漢学両派の教官が対立する。昌平学校の伝統を固執する学生を国学者教官が弾圧したことから教官同士の対立へと広がり、ついには授業もできないほどの混乱に陥ったのだ。困った政府は明治3年2月に新たに「大学規則」を制定し、混乱収拾を図った。規則の制定には加藤弘之が参加し、西洋の大学組織を取り入れた内容になった。これによって国学・漢学の党派的対立を封鎖しようとしたのだった。ところが5月になると、今度は国学派と漢学派が結束して洋学派と対抗するという新たな混乱が生じてくる。国学漢学連合軍が洋学的「大学規則」に反対する建議書を提出するのである。それが洋学派の大学別当松平慶永と国学・漢学派の副島種臣学校掛との対立に発展する。この混乱は結局解決することができず、7月12日に、大学校は閉鎖されるのである。さて他方、開成所を母体として設立された大学南校は、昌平校を母体とする本校が閉鎖されたために独立し、新たに学校規則を制定しなくてはならなくなった。これが西の作成した「大学南校規則」である。

この大学規則の概要は蓮沼啓介が概要を紹介している¹⁹⁾。それによると、全体は外国語と数学を教える普通科と専門の二科にわかれ、専門科はさらに法科・理科・文科に分かれている。また文科にはレトリック、ロジック、ラテン語、各国史、ヒロソヒーが配置されている。これは「百学連環」に近い構成であり、西の意向が強く反映されているように思われる。蓮沼は「かくて西は国学や漢学に対する洋学の優位を制度に定着し、その学問論に基づく大学機構に具体化する途を見事に切り拓くことができたのである²⁰⁾」と記している。さて大学南校規則を制定する時に、西は津田とともに「学制舎」を制定した国学派の矢野玄道と協議していたことはすでに指摘した。この間の事情は大久保が紹介している²¹⁾。

矢野は弟に宛てた書簡の中で「西と津田のことを洋学者であるけれども「中々アシクモナク」と記し、加藤弘之や神田孝平と違って「洋学教育一点張り」ではなかった二人に対し好感を示したようである。西と津田が矢野とどのような会話を交わしながら共同作業を進めたのかを想像するのは興味深い、二人ともに（とくに津田は）国学の素養があり、矢野をうまく懐柔することに成功したようである。

以上見てきたように明治初年の大学構想は国学・漢学・洋学の三派によるヘゲモニー闘争の場になっていたのである。西はその渦中であって、洋学派の代表として大学構想を描いたことを再確認しておく必要がある。西はいわば国学派・漢学派の尊皇攘夷の学問観と対抗する思想闘争を戦っていたわけで、「百学連環」における漢学批判には、この大学理念を巡る闘争が背景にあることを考慮しなければならない。さてこの大学規則と同時に、貢進生の募集と海外留学生の派遣規則の制定がおこなわれた²²⁾。これも西の構想によるものだと思いたいが、蓮沼によると「西がいつまで学制御用掛を兼務していたか明らかでないため、明治3年12月22日の海外留学規則の起草に彼が何かかわりを持ったかどうかは今のところ全く不明」である。つまり西は大学規則作成後まもなくして、大学官僚としての仕事から離れることになるのである。西の才能を高く買っていた山県有朋が兵部省に引っ張ってってしまうからである。そもそも新政府内部では、沼津から呼び寄せた西周を巡って、兵部省と大学掛のあいだで奪い合いが演じられていて、最初から兵部省と大学掛の両方から辞令が交付されるという不思議なことが起こっていた。山県の豪腕によって西の活躍の場は、司法から、兵部省、参謀本部へと移ってしまう。これを蓮沼は「西の後半生の運命決定の重大な契機」だと記している。日本における大学設立から西周がはずされてしまうことは、西にとっても日本の大学にとっても残念なことであったが²³⁾、結局、これ以降の西は兵部省の仕事に専念することになる。

西が大学規則を起草してまもなく、育英舎が誕生する。沼津兵学校の教え子たちが西を追って上京し、指導を請うたのであった。西がそれに応じて育英舎「塾則」を作成したのは明治3年11月1日、日記に「塾定まる」と記すのが同4日、「此の日開塾の宴を開く」と記すのが6日。西はおそらく学制取調の仕事から離れることを残念に思いながら、そのヨーロッパ的の大学設立構想の想いを、この小さな私塾で実現しようと考えたのでろう。大久保利謙のいうように「まさに破天荒な試み」である「百学連環」講義は年末から開始されることになる。帰国から5年が過ぎようとしていた。

3. 「百学連環」における「理学」

以上見てきたように「百学連環」は、ライデン大学で学んだ西洋近代科学体系導入の試みと、大学構想における儒学・国学との闘争との延長線上に位置づけることができる。だがこれをさらに広いパースペクティブ、つまりわが国における西洋近代科学と東洋的学問との出会いと葛藤という歴史的な文脈においてみればどのようなようになるのであろうか。ここで

は「百学連環」の内容を検討しながら、長期的文脈における位置づけをしてみたい。

「百学連環」全体は「総論」「普通学」「特殊学」で構成される。「特殊学」は更に「心理上学Intellectual Science」と「物理上学Physical Science」に分かれる。西は「総論」において西洋近代科学の概説を試みたあとで、「普通学」（歴史、地理学、文章学、数学）、「心理上学」（神理学、哲学、政事学（法学）、制産学、計誌学）、「物理上学」（格物学、天文学（星学）、化学、造化史）の個別学科の概説を口授する。さてこの普通学、心理上学、物理上学という分類はそれぞれ、教養科目、文化系科目、理科系科目に相当するものであり、ほぼ近代の大学の学部構成と対応する。だが人文社会科学系の学問を「心理上学」、理科系の学問を「物理上学」と命名したこと、すなわちともに「理学」であるとしたことは、西の独創であり、その学問観の表出であった。「心理」と「物理」の分節化の意味を長期的文脈のなかで再確認しておこう。

山室信一はその論文「日本学問の持続と転回」²⁴⁾において、江戸時代の蘭学導入期から明治末にいたる、「日本学問」（儒学・国学）と洋学との学問覇権史とも呼ぶべき歴史を俯瞰的に描写している。この覇権闘争のなかで闘われたのは「理」の専有権であった。しばらくは山室論文に従って「理」の転回の歴史をたどってみよう。

理学とはいうまでもなく宋学をさす性理学、義理学、究理学の略語であり、東アジア思想圏において従来学問の最高形態を指呼する用語であった。ところが前野良沢は『菅蠡秘言』（1777年）のなかでオランダ語のnatuurkunde（自然科学、博物学、物理学）に「究理本然ノ学」の訳語を与えた。さらに本木良永は、わが国に地動説を伝えた翻訳書（1791年）のなかでこの単語を「性理学」と訳し、高野長英は『聞見漫録』（1835年）のなかで「格物究理学」と表記した。当時の蘭学辞典は究理学、本然理学、天理学などの訳語を採用していた。また幕末期に最も流布した物理学書川本幸民『気海観瀾広義』（1851年）には「[ヒシカ]は和蘭にこれを「ナチュールキユンデ」と云ひ、先哲訳して理学と云ふ。天地万物の理を窮むるの学」と記し、翌年広瀬元恭の訳した物理学書は『理学提要』と題されていた。つまり蘭学界では早い時期から自然科学あるいは物理学の訳語として「理学」「究理学」が用いられ、幕末にはほぼ定訳と見なされていたのであった。

他方、「理」を窮めることを学の目的とした本家本元の儒学はこの事態にどのように対応したのか。西洋天文学の最初の紹介書『乾坤弁説』（1656年）の校注者向井元松は、西洋天文学がただ形器のみ詳しく道理を窮めることがないとして、これを窮理の学とは認めないと判断した。新井白石の『西洋紀聞』（1715年）も同じ判断を下す。しかし形而下の自然学としての西洋学術の優越性は否定しがたく、三浦梅園は『帰山録』（1708年）のなかでオランダ通詞松村某の「西洋ノ学ハ能クモノノ理ヲ推シ極メ物ノ性ヲ尽ス」という言葉を肯定的に書きとめ、昌平校の儒官佐藤一斎は『言志録』（1824年）に「吾が儒の窮理は唯義を理すのみ。義は我に在り、窮理も我に在り。若し外に徇ひ物を遂ふを以て窮理と為さば、恐らくは終に欧羅巴人をして吾が儒より賢ならしめん」と記すに至る。儒学も蘭

学の「理学」を認めざるをえなかったのである。

しかし攘夷の思潮が高まると反動が起こる。窮理の学を用いる蘭学者への反発は強まり、大橋訥庵や会沢正志斎は西洋窮理は「理を亡ぼす」ものとして排斥を訴える。だが、佐久間象山や佐藤一斎らは、西洋の究理学を形而下のものに限定し、本来の形而上的究理学はあくまで儒学にあると考えることによって、儒学における窮理の維持に努めようとする戦略を選択する。そして、この考え方の延長上に、ヒロソヒーを「哲学」ではなく「理学」と訳すべきだとする中江兆民（『理学鉤玄』、明治19年）、西村茂樹（「稿本「哲学語解」識語、明治32年」、三宅雪嶺（『明治哲学界の回顧・附記』、昭和7年）たちの主張が生まれることになる。

さてこうした歴史的な文脈のなかにおいて、西の「心理上学」「物理上学」という学問分類法はどのような意味を持っていたであろうか。蘭学によって西洋自然科学の「理」の有効性はすでに否定しがたいものとなっていた。他方、儒学はその本来の「理」を自らの専有と見なし、洋学の「理」を形而下の理、あるいは「気」に閉じこめようとしていた、そのような時期に、「オランダに渡った西周と津田真道によって、自然科学だけでなく、人文、社会にかかわる学問にも専門諸科とその体系があることが実際の学習を経て伝えられるようになった」²⁵⁾と山室は指摘する。「百学連環」の学問体系について山室はこう記している。「この学問体系がA.コントの実証主義哲学やJ・ヘブンのMental Philosophy、1857年から示唆を得ていることは間違いないとしても、心理上学、物理上学という区分には、これまでみてきたように西洋学術の位置づけをめぐって、また窮理の二つの分化をめぐって展開されてきた徳川時代以来の議論が底流としてあることは否定できないはずである。しかも、このような分類をした西においては心理の学が物理の学に優位するというそれまでつきまとっていた価値判断は無用のものとなった。それは一見何気ないが、しかし画期的な伝統的な理の観念からの転回なのであった。」²⁶⁾ここでいう「伝統的な理の観念」とは、蘭学の形而下の理学に抵抗して、儒学が自らの専有とした形而上的「理」である。しかし西はこの形而上的「理」もまた西洋の人文社会科学の側にあることを宣言したわけである。

その根拠は西洋の「理」の定義の明晰性にある。つまり人文社会科学にはその固有の理＝アポステリオリの理、つまりreason、道理、理性があり²⁷⁾、自然科学にはその固有な理＝アプリオリな理、すなわちnatural law法則があるのである。この明晰な定義が与えられた「理」は、儒学の曖昧な「理」より優れている。「心理上学」と「物理上学」という命名には、西洋の人間学に「理」があることを宣言して、儒学が死守する最後の砦を突き崩そうという西の明確な意図を読むことができるのである。

4. 「百学連環」における「哲学」

論の展開上からは、ここでは「百学連環」の「儒教批判」を検討しなくてはならないと

ころであるが、与えられた紙枚では十分な記述ができそうもないことから、日を改めて論じることにはしたい。結論だけを簡単に記しておけば、「百学連環」における儒学は近代的学の基盤となるエピステーメーとしては不完全であり、時代遅れであると結論されているとすることができるだろう。むしろ儒教は耶蘇教と並んで「教法」のひとつと位置づけられるべき存在となったのである。そもそもライデン大学がすでに世俗化された近代大学であり、西は近代的「学」の成立は宗教からの分離を前提することをはっきり認識していた。以上が「百学連環」における「儒教批判」の要点であるが、しかし、西にとって儒教はエピステーメーであることをやめたとはいえ、日本という現実を構成する重要な要素ではありつづけた。つまり日本を考えるさいに無視することのできない研究対象として、とりわけ日本社会の近代化が問題となる場面では考慮しなければならない重要な要素であり続けた。この点が儒教イデオロギーを批判する福沢諭吉との根本的な相違いであると言えよう。西はエピステーメーとしての儒教は否定したが、イデオロギーとしての儒教の存在は否定しなかった。あるいは、それが現実である以上、否定することなど問題にはならなかったと言すべきであろう。

儒教の問題はこのあたりで切り上げて、ここでは西が物理上学と心理上学の二つを体系的に理学として組み入れることにより、「百学連環」によってどのような新たな学問観をもたらそうとしたのかを検討してみたい。

西洋の学問を論じるにあたって、西はまず「学域」つまり学問領域の説明から始める。

凡そ学問には学域と云うありて、地理学は地理学の学域あり、政事学は政事学の学域あり、敢て其域を越へて種々混雑することなし。地理学は地理学の域、政事学は政事学の域、何れよりして何れ迄其学の域たることを分明識察して、其の境界を正しく区別するを要すべし。故に今政事学を以て専務と為す人に依りて、器械の事を以て問んと欲するとき、其人縦令器械の学を知ると雖も之を他に譲りて敢て教へざるを常とす²⁸⁾。

学問には専門分野があって、専門分野の間には明確な境界がある。この境界は厳格に尊重しなければならず、たとえ他分野の知識を持っていてもあえて口出ししないのが慣例だというのである。過度の専門化に対する批判的言説に慣れてしまったわれわれは、つい、なぜ西はこれほど学域を強調するのかと疑問に感じるほど力が入っている。だが、「百学連環」全体を貫いているのは、このように境界線を引き、分割し、分析し、細分化しようとする精神である。そのことは「理」の分離においても見たところであるが、さらにいくつか例を挙げてみよう。

学術は「ありとあらゆるを分明に知る」[学science]と「生ずることを知る」[術art]に分かれる。また学と術はその方法に「観察theory」と「実際practice」のふたつがある。

「学」は「単純科学Pure Science」と「適用科学Applied Science」に分かれ、「術」には「技術Mechanical Art」と「芸術Liberal Art」の区別がある。學術の根源は「知行」の二つであって、「知」と「行」は区別しなければならない。文章には文章学Rethoric、詩Poetry、歴史学History、語源学Philology、論弁学Crisismの5つの学がある。

語源学はギリシア語とラテン語、さらにサンスクリット、ヘブライ語、ペルシャ語、アラビア語を学ばなくてはならない。文章は學術に関係するものの、學術ではない。器械やインスタレーションと同じく、學術の方略、策、媒である。実験には実験Observationと試験Experienceの二つがある。真理を見出す法として致知学があり、帰納法と演繹法がある。真理を知るには二つの知り方がある。陽表効positive resultと陰表効negative resultである。ただnegative resultとnegative knowledgeは区別しなくてはいけない。學術を供する才能には性Faculty、適質aptitude、技倆genius、才能abilityがある。学には規模system、術には方法methodがなくてはならない。學術には「一理の万事に係はる」普通common science学と「唯だ一事に関する」特殊particular science学がある。又学にはIntellectual Science心理学上の学とPhysical Science物理上の学がある²⁹⁾。

以上は学問の一般的定義に係わる「総論」からに限定して抽出したものである。続く「第一編」「第二編」では、個々の専門領域における区分、分類、分析が続くのである。山室信一はこうした精神の在り方を「西の分光器」という卓抜な比喩で表現し、その意味を「専門性と自立性の確定を学問の第一の課題と考えた西周は、たとえ専門外のことで知っていることがあっても妄りにこれを教えたりしないことが専門の学者に要請されていると説く。そこには専門外のことにわずらわされないという以上に専門の独立を守り、同時に不確かな知識がもたらす混乱や災厄を避けるという意識が強く働いている」³⁰⁾と解説している。

一般に「百学連環」は西洋学問を体系的に紹介したと言われる。確かにそれは間違っているのではない。だが注意しなくてはならないのは、西が力点を置いているのは体系の包括性ではなく、むしろ分節性である。「結びついている」というよりも「切れている」ことの重要性である。ここで西は分析的な精神をヨーロッパの学問の基本的性格と捉えていることは明らかである。認識方法としての分析と、学問領域における専門性こそが、西が日本にもたらそうとしたヨーロッパ的価値であった。

ところでこうした学問の分析的定義はまた同時に、学者の存在定義とも関連する。西が「学たるものは苟も無二の真理を捕らえて胸中に深く知らさるへからず。かく万物皆其真理あり。故に此真理を求むるか為に物に就て講究し、師に就て見聞し、心に信なして動すへからさる、是其真理にして、是を講究見聞することは是皆学なり」³¹⁾と言う時、学者とは専門分野における真理を、その分野固有の方法を駆使して探求する存在であると言っているのである。この専門家指向性はヨーロッパの学者が総体的な知の在り方を問うフィロゾフから、部分的ではありながら精密な知の在り方をめざすサイエンティストへと移

行しようとする19世紀半ば以降の新たな傾向を反映したものである。歴史的に見れば自然科学的方法論が人文社会科学の領域に浸透していく過程で生じた変容である。専門性を重視すべきことをふまえながら、西が自己を哲学を専門領域とする学者に任じたことは西にとっての哲学がどのようなものであったかを考える上で注目すべきことである。

西は哲学を次のように定義している。「ヒロソヒーの定義はPhilosophy is the science of sciencesとて、諸学の上たる学なりと言へり」³²⁾。これは、いわば哲学の伝統的な、18世紀的な定義であるといえよう。だが続けて西は哲学の内容を更に6種類に区別する。「第一致知学Logic第二性理学Psychology 第三理体学Ontology 第四名教学Ehtics 第五政理学Political Philosophy或はPhilosophy of Lawとも言へり。第六Aesthetics等なり」。これは19世紀的な哲学定義であるといえることができる。いわば哲学観が分裂している訳であり、西がいずれの「哲学」を指向したのかということが問題になるだろう。

「西周における哲学」という大きなテーマをここで扱う訳にはいかないが、ひとつの視点として次のようなことが言えるのではなからうか。後の西の仕事を見てみると、上に挙げられた哲学の専門分野のうち、致知学、性理学、名教学、政理学にかかわるものが重要なものとして残されている。西は、「学の学」としての哲学というよりも、専門学としての哲学を指向したのではないだろうか。改めて言うがこれはひとつの視点に過ぎないし、また推測の域を出ない。だがあえて推測の根拠をもうひとつ挙げてみよう。専門学としての哲学を専門とする学者と自己規定した西の姿勢を、明治7年のいわゆる「学者職分論」論争のなかにも見ることができるのではなからうか。

ここで改めて福沢論吉の「学者の職分を論ず」を紹介する必要はないだろう。日本独立の危機を説き、その原因を官民の不均衡にありと断じ、官途に就く洋学者を糾弾する雄弁はよく知られているからである。それに対して、西は「非学者職文論」を発表する。だが注目しなければならないのは、西が福沢の「洋学者は官途に就くべからず」という主張に正面切って反論をしている訳ではないという点である。西は福沢の立論に乗っていないのである。では西の反論はどのような意味で反論となっているのだろうか。西は、第一点に福沢の起論、日本の独立が危うい、は根拠がなく、それにもとづく論全体を「詭論」であると切り捨てる。第二に、政府は依然として専制、人民は依然として無気無力であるという状態を肯定しながらも、「一旦の好意をもってその凱捷を得べきにあらず」と、福沢の問題提起と問題解決仮説との間に大きな落差があることを明らかにする。第三点、学術・商売・法律が外国に及ばないという福沢の指摘を、「事由を考えずしてみだりにこれを憤る」「徒為」であると論証する。つまり西の反論は、福沢の華麗で大仰なレトリックに満ちた文章を、論理的整合性のない文章であることを暴き出すことをめざすものである。これは官と私との論争ではなく、西洋古来のレトリカとロジカとの抗争の伝統に位置付けられるべき論争であり、雄弁術と論理学、またジャーナリズム言説と学者言説との抗争、さらに実学と専門学との抗争に広がる論争と考えるべきではなからうか。

おわりに

大学構想の仕事から引き離され、私塾育英舎で「百学連環」を講義した後の明治6年以降、西は明六社の社員として華々しい「啓蒙活動」に入る。だが西の執筆した論文は、他の社員と比較して、致知学の専門的色が濃いと指摘されている。ここであらためて西の啓蒙活動とはどのようなものだったかを問い直すことが必要であろう。というのも西の啓蒙活動は「百学連環」の延長線上に位置するからである。明治啓蒙思想家のなかで西が特異な位置を占めているのは、ライデン大学留学経験に裏打ちされたヨーロッパの学問の咀嚼が基礎になっている点にある。その大学経験と「百学連環」は、以降の西の仕事を評価するための重要な視座を与えるものではなかろうか。

注

- 1) 大久保利謙「解説」（『西周全集』第四巻）592-593頁。
- 2) 西周「百学連環」（『西周全集』第四巻）11頁。
- 3) 吉見俊哉東京大学教授は東京大学21世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」プロジェクトの一環として進めている情報ネットワークエンサイクロペディアの構築を、西の訳語の「運動性」に注目し、「新百学連環」構想と名付けている。吉見俊哉「ユビキタスと新しいエンサイクロペディア」（坂村健『ユビキタスでつくる情報社会基盤』東京大学出版会、2006年）235-238頁。
- 4) 高坂史朗「新しい世界を求めて－西周とオランダとの出会い－」（島根県立大学西周研究会編『西周と日本の近代』、ペリかん社、2005年）62-64頁に掲げられた高坂訳による。
- 5) 大久保利謙「解説」（『西周全集』第四巻）594-595頁。
- 6) 開明的といわれた蕃書調所においても、その教育は句読教授による句読と講釈、生徒同士の会講・輪読という、昌平校とたいして変わらない授業スタイルであった。大久保利謙『日本の大学』（玉川大学出版部、1997年）132頁参照。
- 7) 西周「百学連環」（『西周全集』第四巻）19-21頁。
- 8) 西周「西家譜略（自叙伝）」（『西周全集』第三巻）755頁。
- 9) 大久保利謙『日本の大学』（玉川大学出版部、1997年）155頁。
- 10) 大久保前掲書 164頁。
- 11) 「慶応三年四月二十六日付書簡」（『西周全集』第三巻）664頁。
- 12) 大久保前掲書 105頁。
- 13) 西周「西家譜略（自叙伝）」（『西周全集』第三巻）757頁。
- 14) 蓮沼啓介『西周に於ける哲学の成立』（神戸大学研究双書刊行会、1987年）199頁。
- 15) 西周「徳川家兵学校掟書」（『西周全集』第二巻）453頁。
- 16) 蓮沼前掲書 192-261頁参照。
- 17) 蓮沼前掲書 224頁。
- 18) 大久保前掲書 168-203頁。

- 19) 蓮沼前掲書 224-226頁。
- 20) 蓮沼前掲書 226頁。
- 21) 大久保利謙「育英舎則解説」(『西周全集』第二卷) 758-760頁。
- 22) 「貢進生」とは諸藩から俊秀を選抜して入学させる制度で、当初は300人余の貢進生が入学した。また明治3年11月12月にかけて6人、翌4年2月に4人の留學生がヨーロッパに派遣された。
- 23) 蓮沼啓介は西周日記が明治6年頃から15年まで欠落している理由として、陸軍省で働くことで機密保持が要請されたためではないかと推測している。説得的な仮説である。そうすると西が最も活躍した時代の「西周日記」が残っていないことは、三つ目の「残念なこと」に加えることができるだろう。蓮沼啓介「西周研究会の成立—島根県立大学西周研究会編『西周と日本の近代』を論評する」(比較法史学会編『規範から見た社会』未来社、2006年) 383頁。
- 24) 山室信一「日本学問の持続と転回」(『学問と知識人』日本近代思想体系10、岩波書店、1988年) 465-498頁。
- 25) 山室前掲論文 481頁。
- 26) 山室前掲論文 486-487頁。
- 27) この意味で井上厚史が「百学連環」の一節を引きながら、西が「革新的な「理」の定義」を下したとする主張には同意できない。引用文中の「理」を「理性」と置き換えてみれば、これが平易な「理性」の説明文であることは明らかである。したがって西の「理」を「朱子学的な理の根本的な読み替え」だとする解釈にも疑問を持たざるをえない。当該部分の「理」は西洋の理性であり、儒学の立場から「革新的」に見えるだけであって、儒学から抽出された「革新的な理」ではないと思われる。井上厚史「西周と儒教思想」(島根県立大学西周研究会編『西周と日本の近代』、ペリかん社、2005年) 168-169頁参照。
- 28) 西周「百学連環」(『西周全集』第四卷) 11頁。
- 29) こうした分類と定義を塾生たちはどのように受け取ったのだろうか。フーコーが『言葉と物』の冒頭で紹介したあの「シナのある百科辞典」の動物の分類法のような幻惑的混乱を与えたのだろうか。それとも「目から鱗が落ちるような」驚きだったのだろうか。「ウェスタンインパクト」と呼ばれる衝撃がどのような感覚で捉えられたのか知りたい。
- 30) 山室信一前掲論文 484頁。
- 31) 西前掲書 26頁。
- 32) 西前掲書 146頁。

キーワード 西周 百学連環 ライデン大学 コント ミル 哲学 論理学 明六社

(WATANABE Nozomi)